RWA - Real World Assets

ChatGPT

起源

元々、金融業界で「証券化(securitization)」や「資産担保証券(ABS)」という概念がある
　現実の資産を金融商品化して投資家に分配する
これを、証券からトークンに置き換えてブロックチェーン領域で発展していった
　2017年にもあったが、このときは規制未整備や流動性不足のため発展せず
　2020年以降に MakerDAO がそういうことをやりだして「DeFiの担保拡張」を「RWA」と呼ぶようになっていった
RWA 自体は DeFi 以前からある概念なので、一応文脈は気にしておこう

現実資産を金融商品化

まず、不動産や国債などの現実資産がある。
　現実資産なので Real World Asset。
　分割投資が難しいし、流動性が低い
この現実資産を裏付けとして証券やトークンに変換する。
　例：不動産を担保にして「不動産トークン」を発行。投資家はトークンを購入することで賃料収入や売却益の分配を受けられる
この証券やトークンを投資家が売買できるようにする

裏付けの確認

裏付け資産があるという前提のRWAなので、その裏付けが存在しないと意味が無い。
　発行者は特別目的会社(Special Purpose Vehicle)を設立
　トークンの所有者は SPV名義で法務局や公的登記簿に記録される
　それ以外にも監査法人などから定期的に監査してもらったり、規制局からライセンスをもらったりなど
つまり、法制度と組み合わせて担保の実在性を保証することになる。違う言い方をすれば、技術で裏付けがあることを検証するしくみを作ることができない。

大ざっぱにいえば、ステーブルトークンの裏付けが現金、RWAトークンはそれ以外の現実資産。
あるいは、RWAトークンを現実資産トークン全体、ステーブルトークンはその部分集合という

見方もある。

RWAトークンの発行者

- フィンテック企業、スタートアップ
- ステーブルコイン発行企業が拡張
  - Circle や Tether も準備資産に国債などを含んでいる。短期国債はほぼ現金という扱いらしい。
- 伝統金融資産、資産運用会社
- DeFiプロトコル自身
  - MakerDAO